

## 東山総合支援学校 令和7年度 後期 学校評価アンケート考察

### ■アンケート回答方法

- ・生徒、教職員については Forms による回答
- ・保護者は Forms もしくは解答用紙のいずれかによる回答

### ■考察方法

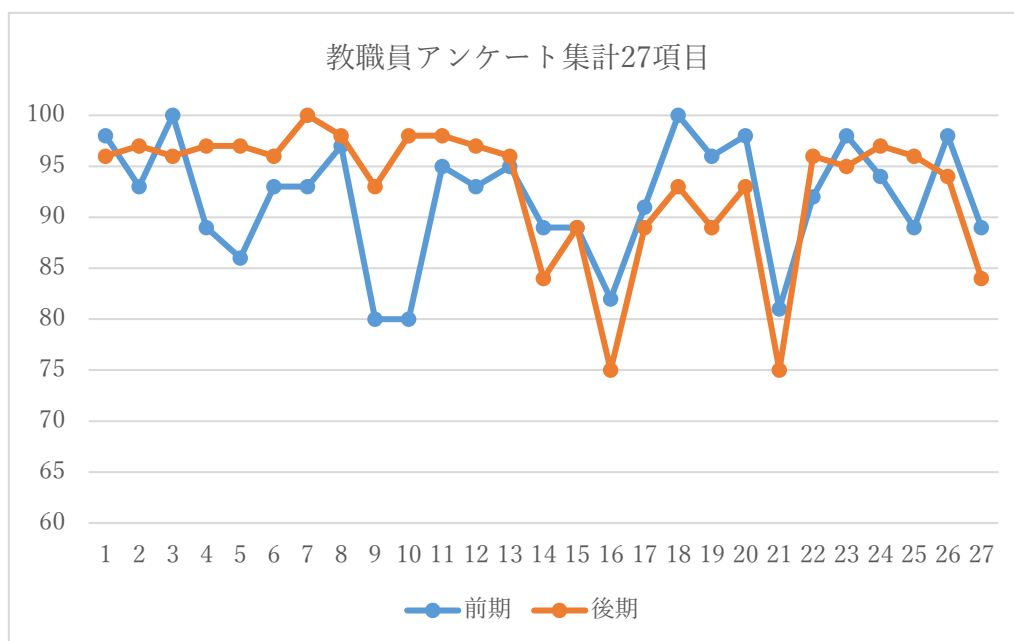
- ・それぞれにおいて「できている」「だいたいできている」の項目を合計したものを、前期と後期で比較し、折れ線グラフで分析

### ■質問数及び回答数

- ・教職員アンケート集計(27項目)(46/46名)
- ・生徒のアンケート集計(24項目)  
(全生徒:88/107名 1年生:37名/40名 2年生:23/34名 3年生:28/33名)
- ・保護者のアンケート集計(25項目)  
(全保護者95名/107名 1年生:41名/40名 2年生:30/34名 3年生:23/33名 学年未入力:1名)

## 1、教職員

前期よりも後期の評価が高い項目が多く、教職員一人一人が生徒一人一人に寄り添った支援を行い、日々の学習活動や指導法を改善していることがうかがえる。



<前期に比べ後期の評価が10パーセント以上上がったもの>

項目4 生徒が満足感や達成感を持ち、共通教科の学習に取り組めるように指導している(88%→97%)

項目5 生徒が満足感や達成感を持ち職場実習に取り組めるように指導している(86%→97%)

項目9 教員は個別の包括支援プランに基づいて計画的な指導や支援を行っている(80%→93%)

項目10 生徒の努力や達成度について評価し、個別の包括支援プランの作成や指導法の改良に活かしている(80%→98%)

項目4 項目5について、共通教科及び職場実習において達成感や満足感を持てるよう、教職員一人一人がきめ細やかな指導や支援に取り組んでいることがうかがえる。項目7の「生徒のいいところを積極的に見つけ、認め、伝えている」においても7%の上がっていることから、教育活動全般において、生徒自身の自己肯定感につながる指導ができていていると考えられる。

項目9、項目10について、項目9は13%、項目10は18%の上昇であった。個別の包括支援プランの作成段階において、教職員一人一人が生徒の将来を見据え、また連携を取り合い短期目標達成に向けた指導、支援を日々考え、実践できていることがうかがえる。

<前期に比べ後期の評価が10パーセント以上下がったもの>

今回のアンケートにおいて10%の以上下がった項目はない。下がったものとして

項目16 生徒が好ましい食生活を送れるよう指導している(82%→75%)

項目18 生徒に学校のきまりや約束を守る大切さについて指導している(100%→93%)

項目19 生徒は学校のきまりや約束を守って生活を送っている(96%→89%)

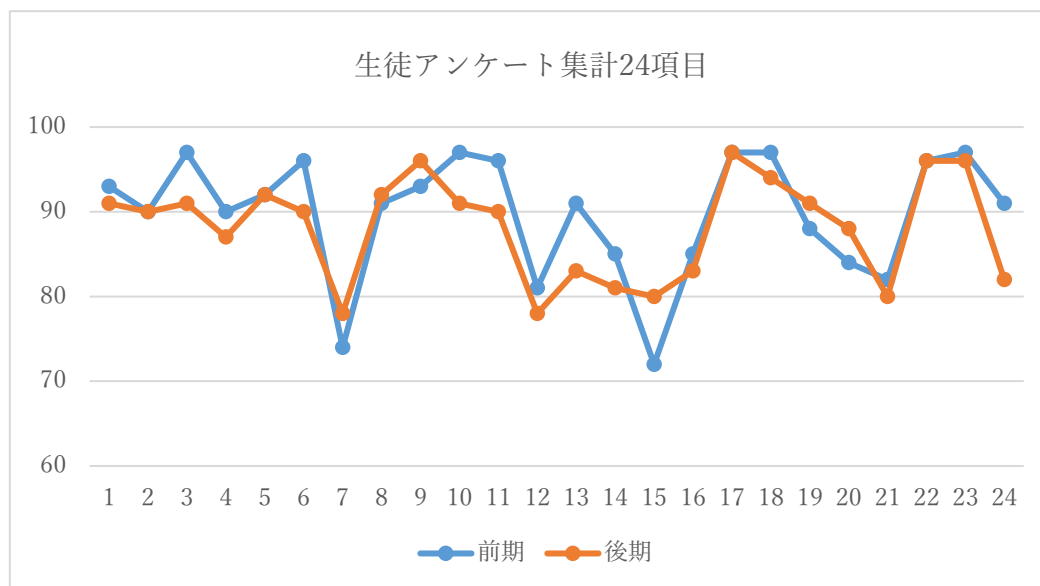
と、いずれも7%下回っている。

項目16については、指導する機会が少ないことも考えられるが、昼食時の様子や個人面談などで聞き取ったり、健康状態を把握したりするよう努めることが必要だと考えられる。

項目18 項目19についてはいずれも学校生活のきまりに関係している。きまりについては生徒自身が考え、規律を作っていくことが前提であるので、生徒会中心に毎年、全校生徒で見直しをしていく必要がある。

## 2、生徒

前期と比べると10%の差異がある項目はなかった。しかし項目の半数以上が前期より下回っている。また、前期で低い評価の項目は若干上がっているが、高い評価の項目が下がっていることも見受けられる。



<前期で低い評価が上がったもの>

項目7 自分のいいところがよく分かっている (74%→78%)

項目15 規則正しい生活を送るよう心がけている (72%→80%)

項目7については比較的低い評価が例年続いていたが、上昇しているということは、自己肯定感を高め、自信をもってほしいと、教職員が教育活動に工夫を凝らしている成果の現れであると考え。これからも少しずつ上昇していくよう、継続した指導、支援をしていく必要があると考える。

項目15については、後期に入り、職場実習等、個人で責任を持って活動する場面が増えていることから、一人一人が規則正しい生活の必要性を感じていることがうかがえる。

項目19 (学校、家庭、社会での) きまりや約束を守っている (88%→91%)

項目20 時間を守ることを意識して行動している (83%→88%)

の2項目の評価についても前期より若干上回っている。

2項目とも、きまりにかかわることである。生徒自身が一社会人を目指して、意識し遵守しようと努力している成果がうかがえるものである。

<前期に比べ後期の評価が下がったもの(5%近くの差異があるもの)>

項目3 地域コミュニケーションの授業で「できた」「うれしかった」ことがある(97%→91%)

項目6 一生懸命に学習に取り組んでいる(96%→90%)

項目10 先生は学習の成果について伝えてくれる(97%→91%)

項目11 友達や仲間を大切にし、互いに協力している(96%→90%)

項目13 自分のことを理解してくれる人がいる(89%→83%)

項目24 困ったときに家庭や学校において相談できる人がいる(91%→82%)

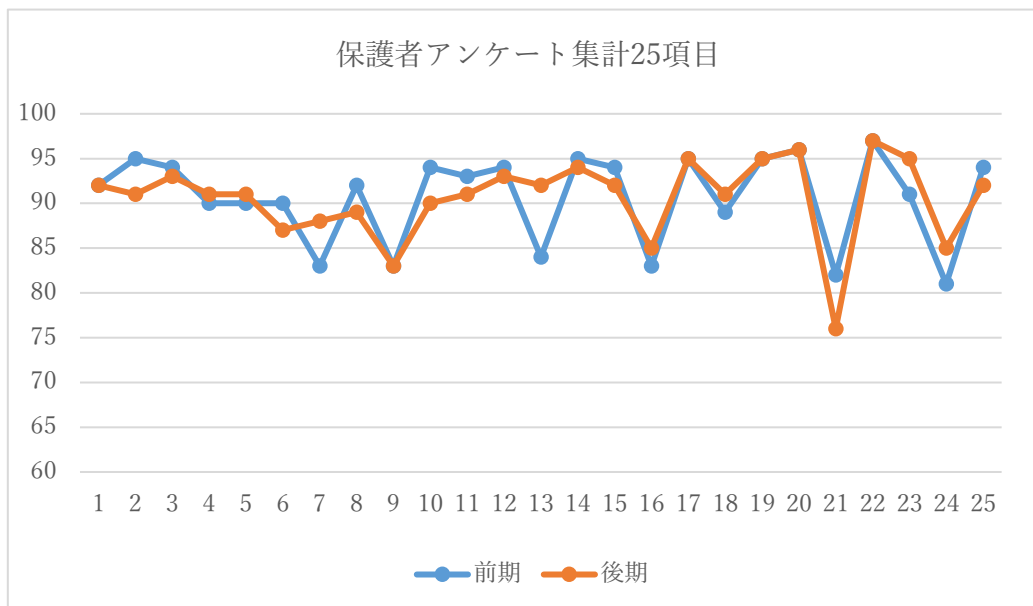
項目3 項目6 項目10 について、項目4の『共通教科の授業で「できた」「うれしかった」ことがある』についても3%減少していることから、活動に取り組む姿勢が整っていないのではないかと考える。前期では新学期より個々のモチベーションが上がっていたが、学校生活に慣れてくるとともに、意欲や積極性が下がっているのではないかと考える。その様子を見逃すことなく、時には「今できることをやりきる」ことを伝えていくことが必要だと考える。また、できたことの成果については、生徒自身に見えるよう、可視化を取り入れて伝えることが大切であることもうかがえる。

項目11 については、さまざまなトラブルや思春期の中で生まれる仲間意識などの要因もあるのではないかと考えられる。一人一人の様子を観察し、少しの異変を見逃さずに司ることが必要であり、互いに協力できる学習内容を取り入れるなど、相手を大切にする気持ちを育ていく視点が必要だと考える。

項目13 項目24 については、多感な時期の生徒に対し、時間をとって対話を重ねていく必要があると考えられる。生徒自身から困りごとや悩みごとを発信することは難しいのではないかと考えると、「いじめアンケート」や「教育相談期間」を十分に活用し、前述したように異変を見逃さずに司り、傾聴し、対話を重ね、相談できる状況づくりが必要である。

### 3、保護者

前期と比べると10%の差異がある項目はなかった。しかし、いくつかの項目で前期との評価の差異が見られた。



<前期に比べ後期の評価が上がったもの>

項目7 子ども本人に自身のいいところを伝えている (83%→88%)

項目13 子どものことを理解できている (84%→92%)

項目23 地域との連携、協働、職場実習等で最後まで取り組めるように励ましている (91%→95%)

項目24 個別相談など学校に気軽に相談できる (81%→85%)

項目7 については5%、項目13については8%前期より評価が上がっている。子どもの日ごろの取り組みを理解し、保護者が評価していることがうかがえる。教職員が保護者へ生徒たちの頑張りやいいところを伝えている成果ではないかと考える。今後も継続して、保護者への発信を続けていくことが大切である。

項目23 については前期より4%上がっている。地域との連携、協働や職場実習を積み重ねることや家庭のバックアップの重要性が生徒の自信や力になることについて理解していただいていることが読み取れる。

項目24 についても前期より4%上がっている。項目7や項目13の結果にもあるように、日ごろの保護者への丁寧な対応が、保護者と教職員の連携を深め、保護者からの信頼を得ている結果と考える。

<前期に比べ後期の評価が下がったもの>

項目2 子どもは目標に向かって学習に取り組んでいる(95%→91%)

項目10 子どもが頑張っている姿をほめている(94%→90%)

項目21 家庭での役割を決め、子どもが責任を持って果たせるようにしている(82%→76%)

項目25 保護者として学校の教育の趣旨や目的を理解している(96%→92%)

項目2 項目10 項目25 については、子どもの目標や活動について、保護者の情報の具体性に欠けているのではないかと推測される。また教職員から子どもの頑張りや努力は伝わり理解しているものの、そこについて家庭での対話が持たれていないことが推測される。参観日や職場実習の様子など実際に見ていただく機会を増やしていけるよう、学校全体で改善していく必要があると考える。

項目21 例年低い評価であり、家庭での役割を作ることの難しさが表れている。役割を担い、継続する意味を三者で理解していくことが先ず大切だと考える。